

視察報告書

北海道恵庭市・室蘭市・白老町

平成28年5月31日（火）～6月2日（木）



アイヌ民族博物館にて

松阪市議会

青凜会

平成28年6月7日

松阪市議会議長 大平 勇様

松阪市議会
青凜会 濱口 高志

平成28年5月31日（火）から6月2日（木）の間、行政視察を実施しましたので
下記のとおり報告いたします。

記

1. 参加者

青凜会

沖和哉 中村良子 濱口高志

2. 視察先および視察事項

(1) 北海道恵庭市

① 「読書のまち恵庭市」の推進について

(2) 北海道室蘭市

① 子育て応援プランについて

(3) 北海道白老町

① 観光行政について

3. 視察内容

別紙のとおり

I.北海道恵庭市

1. 恵庭市の概要

(1) 人口 68,988人

(2) 面積 294.65km²

(4) 概要 札幌市の南に位置し、古くは石狩穀倉地帯の一角を占め、農林業を中心に発展した。市域の45%が市有林、23%が自衛隊用地であるが、札幌市内まで23分、新千歳空港まで13分という良好な交通条件から、近年ではベッドタウンとして発展し、人口が増加傾向にあり、高齢化率も22.6%と低い。自衛隊は3部隊あり家族も含めると約8500人に上り、市人口の10%以上を占めている。

また近年では、ガーデニングのまちとして脚光をあびており、札幌大通りの花はほとんどが恵庭市からの出荷品である。ガーデニングの整った民家の庭の一般開放もしている。

2. 対応者

恵庭市議会事務局 次長 森 司氏

恵庭市議会事務局 主事 近藤 伸哉氏

恵庭市教育委員会 次長 内藤 和代氏

恵庭市教育委員会教育部 図書課 岩崎 春恵氏

恵庭市教育委員会教育部 図書課 高尾 優太氏



恵庭市図書館にて研修

3. 視察項目

(1) 「読書のまち恵庭市」の推進について



恵庭市教育委員会 内藤次長 岩崎課長

恵庭市では平成4年に市立図書館がオープンした。市内には分館2つとインターネット予約できるブックステーション1つがある。当初は一人当たりの貸出数が年間5.5冊であったが、現在では9冊となっている。

「読書のまち」を目指して、下記のような様々な取り組みを実施してきた。

- 1) 平成12年 ブックスタート事業開始（9・10カ月児対象）
平成19年 ブックスタートプラス事業開始（1歳6カ月児対象）
- 2) 平成16年 市内小学校8校全校に学校司書を配置
平成18年 市内中学校5校全校に学校司書を配置

学校司書は第1種非常勤職員で29時間/週の勤務だが、夏休み等の休みを前倒して授業のある日に出勤しているため、ほぼ常勤である。司書資格を条件に職員を募集したため、市内だけでは集まらず、半数は市外の人である。

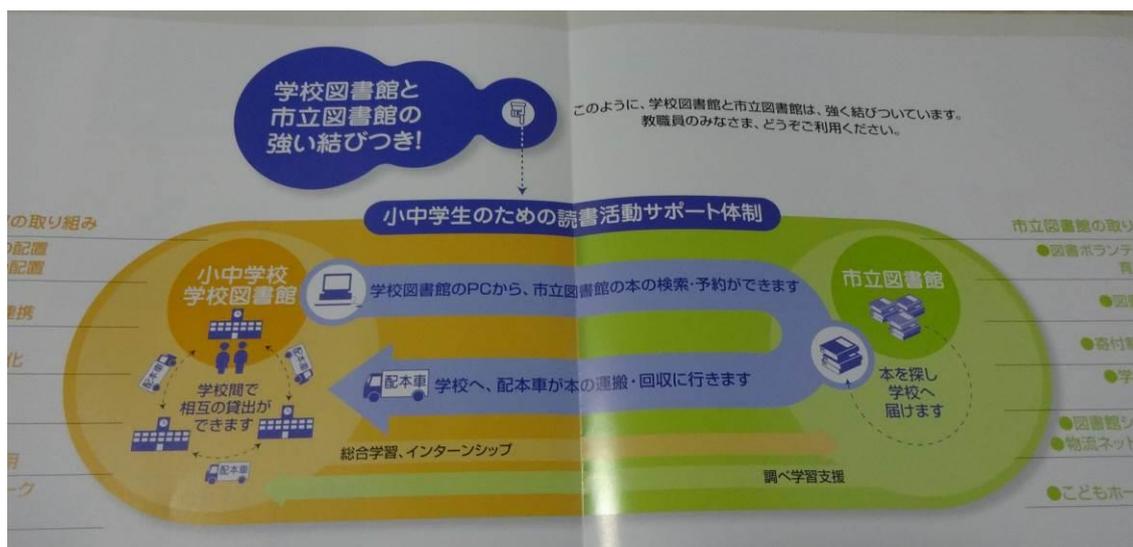
学校司書だけでは学校内の読書活動を推進できないため、教員が各クラスを回って対応。担任クラス外のクラスも回るため、様々な視点での読書推進ができています。

また、教員が書評を書き、個人の本を図書館に寄贈する活動もある。

3) 平成19年 学校図書館システムとオンラインの連携開始

市立図書館と各学校図書館をオンラインで繋ぎ、相互に蔵書を利用できる。これにより市内の蔵書42万冊が利用できるようになった。

図書館・各学校を毎日1台の車が巡回しており、オンラインで申し込んだ本が翌日には配達される。



4) 平成21年 家読（うちどく）推進事業開始

家庭では「家読（うちどく）」として、家族が同じ本を回し読みすることで、感想の共有をすすめることで、親子の会話の創出にもなっている。

しかし、保護者間で温度差があり、なかなか進まないのが現状。強制できるものでもないし、活発な家庭の取り組みを学校内外で紹介したり、少しずつ啓発をすすめている。

5) 平成25年 「恵庭市人とまちを育む読書条例」施行

図書館条例制定は、市民周知をすすめた意味合いがある。条例の存在というよりも、読書活動の啓発や広報を広げていった経緯がある。まちじゅう図書館（平成25年開始）などもその例である。市内の事業所や店舗で、店主等のオススメ本を展示したり、紹介したりすることで、本を通じた交流が広がるような仕組みを考えている。市の

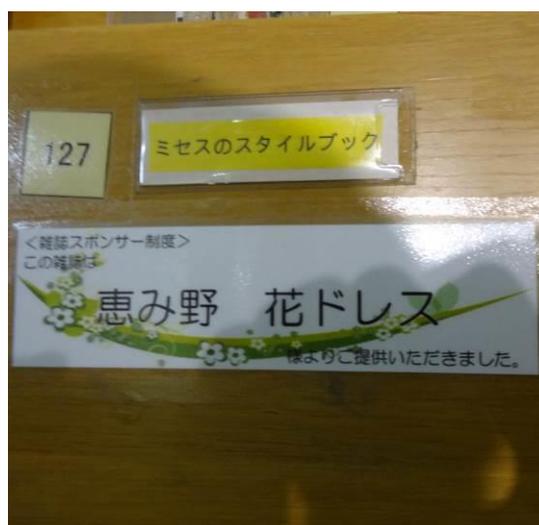


予算化は MAP、のぼり代、バッジ程度であるが、市民の方々が積極的に読書推進活動に関わってくれるようになった部分はあると感じている。

6) 平成27年 雑誌スポンサー制度開始

図書購入予算が削られたため、月刊誌等の購入費用を月刊誌のカバーにスポンサー一名を入れることで年間の購入費を捻出するという制度である。

平成27年は30誌20万円相当のスポンサーが集まった。本年は35誌に増えた。



7) 図書ボランティア

現在市内には図書ボランティアが38団体あり、500名以上のボランティアが活動している。ボランティアの種類は、読み聞かせ、本の修理、図書室の内装（暗くて埃っぽい室内の内装を明るくする等の工事）、本のリサイクル等多岐におよんでいる。各団体の活動は活発であり、文部大臣賞等はたくさん賞ももらっている。

市の役割としては、企画における補助や各種機関への橋渡しなど、サポートに徹している。ネットワークを通じて作家の先生を招いたり、読書会や講演会を企画するなど、団体の立案で開催されるイベントも増えてきている。ボランテ



ィア団体の立ち上げを補助する際は、各種研修を進めつつ、協働する。

年2回のリサイクル市では、毎回8万円程度、今年は約10万円の売り上げがあった。定着してきているとして感謝している。売り上げは全額図書館予算として計上し、高額図書の購入に充てている。

今年9月、生涯学習の複合施設が開設されるが、そこにリサイクル本を集めて、本の5万冊回廊をつくる予定である。

4. 所感

ハード云々ではなく、まずもって、市全体で街全域で読書を広げていく、本を愛する動きが土壌としてあった上に、図書館整備や学校連携を進められたところに意義があったのだと感じた。そもそも、本は誰かに無理に読まされるものではないし、誰かが大声でトップダウンで指示をしても、読書活動など広がるものでもない。だからこそ、ソフト面の充実として、様々な仕掛けや事業を進めていけるのではないかと感じた。

また、学校教育面では、市立図書館と各学校図書館をオンラインで繋ぎ、相互に蔵書を利用できるシステムを構築されている。現在、松阪市では図書館改革を検討中であるが、ぜひともこのシステムを取り入れていただきたいと感じた。恵庭市では各小中学校に司書を配置されており、羨ましいと感じた。松阪市では小中学校数が多く、各学校の生徒・児童数に差が大きいため、「各校一人司書配置」は難しいと思われるが、読書習慣づけ、国語力向上のためにも検討していきたい。図書に親しむ指標として全国学力テストでの質問「読書は好きですか」に対する「当てはまる」が85%を目指しているというものユニークだと感じた。

Ⅱ．北海道室蘭市

1．室蘭市の概要

(1) 人口 89,150人

(3) 面積 80.65 km²

(4) 概要 北海道南西部に位置し、西に向かって突出した馬蹄形の絵柄半島を中心に市域が広がっている。面積は狭く、起伏に富んでおり、北海道のイメージとは違った地形となっている。

明治5年から港を中心として発展し、鉄鋼業の町として栄え、昭和44年には人口が18万人に達したが、その後人口が減り続け、半分となっている。

名物としては室蘭やきとり（豚と玉ねぎの串焼き）、室蘭カレーラーメン（札幌みそラーメン、旭川しょうゆラーメン、函館塩ラーメンと合わせて、北海道4大ラーメンと言われている）がある。

景勝地としては、全国景勝地100選の投票でナンバーワンに選ばれた地球岬がある。その他数多くの観光スポットがあり、映画やテレビのロケ地になっている所が多い。

2．対応者

室蘭市議会 副議長 小田中 稔氏

室蘭市議会事務局 議事課 総務係 花田 賢司氏

室蘭市保健福祉部 子育て支援室 室長 中澤 昌弘氏



室蘭市役所にて研修

3. 視察項目

(1) 子育て応援プランについて



保健福祉部 子育て支援室 中澤室長

室蘭市では平成25年に全国に先駆け人口動態調査を行った。その結果、出生数の減少、子育て世代の近隣市町への流出が多くなっていることが判明した。室蘭市は平野が少なく、土地、家賃が近隣市町より高くなっていることも原因の一つで、これらも含め子育て支援が必要と考え「子育て応援プラン」を実施した。

1) 放課後児童対策

正規の放課後児童クラブは小学校15校中2校だけしかない。これは市直営で、保護者負担金は、月3400円と安価である。11校には「スクール児童館」というものがあり、これの保護者負担金は、月600円と非常に安価である。内容的には児童クラブと変わらないが、もともと安価であったため、料金を児童クラブに統一することが難しく、この料金となっている。預かり登録せずに、たまに遊びに来る児童は無料で利用できる。

2) 住宅対策

- ・子育て世帯（18歳未満の子がいる世帯）は、市営住宅の抽選番号を一般家庭より増やして当たりやすくしている。
- ・住宅を新築または購入した子育て世帯に対して、3年間固定資産税を半額免除

している。平均的には8万円の固定資産税が3年間半額になるため、約12万円の補助となっている。

3) みんなで子育て

- ・女性向け職場改善

産業の中心の重工業はもともと男性の職場であったため、女性向けトイレ、更衣室、シャワー室が整備されていなかった。これらを整備する企業に2分の1、上限200万円の補助を行う。

- ・社宅

企業の従業員向け住宅整備に対し、10分の1、上限1000万円の補助を行う。

4) 「子育てガイドライン」発行

市の様々な住民サービスの中から、子育てに関するものを抽出し、1冊の冊子にまとめ、子育て世帯に市のサービスの周知を行っている。



5) フリーペーパー「こらん」発行

平成27年に「子育て応援団」を創設し、現在120の団体・個人が参加している。これは、まち全体で子育てを応援しようという制度であり、各団体に対して年間1万円までの補助を行っている。

フリーペーパー「こらん」も子育て応援団が発行しており、主に広告収入で費用を賄っており、室蘭市だけでなく近隣市町へも配布しており、発行部数は約1万部となっている。



6) 成果

減少傾向にあった出生数は、昨年5年ぶりに増加となった。また転出数も一昨年に比べ200人減った。経済状況の影響もあるため、事業の成果と直接結びつくかは、現在検証中である。

4. 所感

室蘭市は50年間で人口が半分になっており、小中学校の統廃合も実施している。北海道のイメージとは違い面積が狭いため統廃合実施に対するハードルは高くなさそうであった。

また幼稚園は全て私立、保育園も2園のみ公立で数年後には全て私立になるとのことである。松阪市では民営化に対する反対意見が多いが、室蘭では純粋にサービスで比較し私立を選択する人が多いためとのことであった。現在では「こらん」で各校の情報も掲載し、保護者が自分のニーズにあった園を選べるようになっている。人口減による定員割れの園が多いためとはいえ羨ましい。

子育て世帯の社会減（近隣市町への転出）のための住宅施策については、まだ効果の検証中とのことだが、効果が期待できそうであるため、松阪市の「子育て一番宣言」の一つの柱として提言していきたい。

Ⅲ. 北海道白老町

1. 白老町の概要

- (1) 人口 17,812人
- (3) 面積 425.64km²
- (4) 概要 北海道南西部に位置しており、アイヌ民族のコタンがありアイヌ民族博物館を民間で運営している。人口の1割がアイヌ民族であり、アイヌ民族博物館で50人を雇用している。パルプ産業が盛んであったが、現在では白老牛の肥育も産業の柱に育っている。

2. 対応者

白老町議会 議長 山本 浩平氏
白老町議会 議員 西田 ゆうこ氏
白老町議会事務局 局長 南 光男氏
白老町生涯学習課 課長 武永 真氏
白老町地域振興課 アイヌ施策推進室 室長 遠藤 通昭氏
アイヌ民族博物館 館長 野本 正博氏



白老町役場にて研修

3. 視察項目

(1) 観光行政について

博物館の入館者数はピーク時には87万人であったが現在は20万人ほどで推移している。東日本大震災で落ち込んだが、その後毎年5千人のペースで回復基調にある。

現在、アイヌ民族博物館は民営であるが、平成32年に国立博物館としてオープンする。それを機に、入館者数100万人を目標に官民一体となって観光客数アップに取り組んでいる。



現在のアイヌ民族博物館の敷地を含め10haが国立の民族共生公園（仮称）の計画地となっており、国が土地を買い取り、施設の整備を行う。国立のアイヌ文化博物館（仮称）の規模は8600m²で、日本一小さい博物館となる。それでも建設費は90億円にのぼる。

ここに500人収容できる体験交流施設を建設し、食堂や

修学旅行の受け入れもできる場所にする。

この敷地（100ha）外に白老町で温泉施設を作り、観光収入をあげる計画である。近くにホテルは無く、20km離れたところが一番近い。温泉施設に宿泊施設を作るか、近くにホテルを誘致することも検討している。ホテル誘致に関しては景観的に問題ないか調査を行っている。



アイヌ文化博物館（仮称）建設予定地

現在、アイヌ民族博物館への入場者の3分の1が外国人観光客、3分の1が就学旅行生、3分の1が一般の国内旅行者となっている。視察当日は3分の2が外国人（中国、シンガポール等アジアからの観光客）であった。



アイヌ文化解説者



中国からの団体客（通訳付き）

アイヌ文化解説者は時折中国語も交えた楽しいトークで入館者を楽しませていた。中国からの団体客には通訳が付いており、何度もここの通訳をやっていた感じであった。

現在50人のアイヌ民族の方がここで働いているが、国立博物館ができると150人へと雇用が3倍となる。北海道の若いアイヌ文化伝承にとって非常にメリットが大きく期待されている。

4. 所感

アイヌ民族博物館は歴史的資料の展示が中心と思っていたが、解説者のトーク、民族舞踊等観光客を楽しませる要素をたくさん取り入れビジネスとして成り立っていることに感心した。歴史伝承をボランティアでなく生活の糧にでき、また国立博物館になることで直接雇用が増え、関連ビジネスでさらに雇用を増やせ相乗効果が期待できるため、国立博物館がオープンする平成32年が非常に楽しみである。関連ビジネスがどう展開されたのか検証していきたい。

アイヌ民族博物館開館30周年に松浦武四郎のモニュメントを建立されたことから、北海道の各市町村と松阪市、および松浦武四郎記念館との交流を活発にして、松阪市の観光産業の活性化を考えていきたい。

以上



松浦武四郎のモニュメント